246
22
183

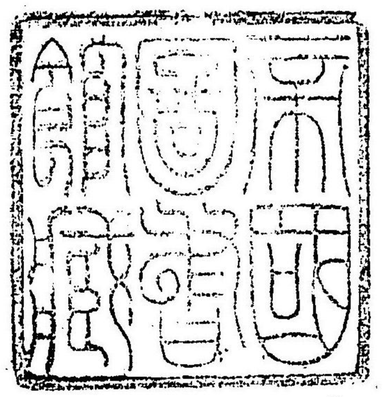
縣度通志

縣志稿

遵義府

藤川

246-183



明治
43. 12. 3
内交

四月　四番目　略脇能
蟻通　シテ　宮寺　ワキ　紀貫之

三月　二番目
忠度　前シテ　尉　後シテ　忠度　ワキ　僧

三月　三番目
熊野　シテ　熊野　ツレ　女　ワキ　平宗盛　ワキツレ　従者

九月　三番目
遊行柳　前シテ　尉　後シテ　柳ノ精　ワキ　遊行上人

三月　四番目
藤戸　前シテ　母　後シテ　子ノ霊　ワキ　佐々木盛綱

早三人
蟻通

和歌の心を知てこそ
神なりけれ
津鴻よしまらぬ
是貫紀の貫之
よてしは和歌道まつりこと
いかに思ふ津鴻よしまらぬ程
今思ふ紀乃路の松と志
夢よ覚よ
三人上

はれ開戸の明るよ都の空月
歌もぢうそとやる方も雲井
い跡よ陽ろり上へ言わるるるよ分る
吉里ちぎ分る鐘の色く芸妓
上やぬよ日暮大雨ふりて空を楽
たる駒ちへて前髪を年ぢへ
いうよ燈暗うして吉野行ぐ加源
虞氏

ぢ乃足ちひぢ弱ぐぢぐ
ちべき便もあ芸妓やぢ
蕭湘の夜の雨きりふ堂
寺乃鐘の きもぢ仏ぢあく
宮寺深ぢ鐘の拝ぢ燈乃光
あんどよ社非びもきわる
よ社頭ちれば燈もなくすぐ寄

此壱ものゝびば非ハきねがあらう
と社申すに宮守獨りもあきらけよ
ぱよしく御燈ハ暗く神和光の影ハ
よもくらからず尊き宮寺や
あぶく具火のきえりについてやすべき
るすれん　此あたりにおか宿もあり
今少しきへだてゝありあき　そろ

くらけれバゆくさきもみえぬくらきこゝろもし乗
たる駒さへいつて前にはもう忘じて
ゆるせ　下馬はわすりもありき
ゆるし　引まやドげるとは心ほど馬ハ馬
上乗なる所ハ　其勿体ありつけは
や蟻通の明神とておとがめし給ふは
恠我なるぞくまりて馬上あらば。

よも出命はんべき上平カル見いふ[illegible]ぎ出ぬ
う。お。拙出弦へ洗森の中ウチ家も
姿宮宮人の[illegible]とそ[illegible]の光の陰より
みきべ家も宮居へ[illegible]あり通の
非の鳥居乃二柱たつ雲はるさよ
ぺんばかりをあやぺも社壇なり
きるぞ。馬上より弱ぬ。江ホ乃柳

陰ぬいもて[illegible]つあぐ弱ぬくとも去ら
で非ぬを忍きぎる社ぺ[illegible]ぬきまく
拙ちゑいぬ[illegible]て渡りぬぞ見い
紀貫之まぐぶ吉ぬ津鳴よまり
貫之まくまり[illegible]ぬさべ[illegible]ようで非
西よ所手向へ見い行みて人
だぺれいひたらん人よ社あきぬ我らぐ

今乃言葉の表いうで神妙み叶へ
きと思ひおぼらもしてとの紫乃ぽそをを
心よ入会れし。あ面ぐ乃立かさ。あれ
よりおきべ。ありどほ。た思ふべきの。ろ
天雲乃立かさ。あれるよ。なすきべ。あ
ぽとり。たぽ。ふべきの。ろ面白しく
神乃叶きぬ耳よ。だよ。ぽ。そ。ろと

思ふ。神妙を。おぐか。納受おろうべき
ろ。ろよ。きろ。ぬ。とぐ。あ。きべ。仔。ろ。神妙
嘗くべきと。萬代乃紫。あ面ぐ乃
立ろ。さ。あ。て。暗き。あ。たべ。の。り
や。ほ。た。思ふべき。ろ。ぬ。高。白
神妙や。元。よ。ぬ。よ。義。あ。ぬ。
元道。ぬ。ち。ま。よ。ぬ。ぶ。め。ぬ。て。ぬ。乃

色ぞ人は哀なりける上歌 はきべ和歌の
ことわざは神代よりもてはやし侍 人倫あまねし 況や見聞をほめざ
らん中にも貴き道 書どころを
うきたまりて いとへ今世の事
はしきおもをえらびて 悦びをのべし
君が代のまぐある道をあらはせり

松よりはたまつくこゝろ高べ事の心はおも
ほあるべ想をつて 和歌は人仏よりなん
でたるおろかなる風俗長寿 涼寿
旋頭混本のたぐひ 歌 身
そつよあらばりまきべ源流 ゆく
きぎる水はの うちの賞 秋の
蟬はいうの老仙 きう和寿の 教

らぬ。ちまきばかりの事にて、
ちぎれば、おどろかす弁も、紙屋の心よ
りあり。宮人もかくるまぶくる逢坂の
関の清水に影をうつしてぞ過ぎし。
をりふしてぞ、やがて本にて
とくとよ。歩みかく。弁慶、鳥帽子を
かき。胡馬に、よいぞえ、ゆやい

又、六九イ、弁慶の弁慶をあ
ぐ。早内、宮人みてまゝまさべつ
とをようぐ。弁慶をすゝめ中へ
家いでくつつとをやさんと弁の
きらゆつまを。早内、杖ぬ手向と
いつ。早内、宮ともちて、義経を
謹ぶ。二九ウ、弁慶、自弁、ウ、ハ人のいと

が人に弁樂をのこぶきの独をうし
ぶらい和ふをたをけぎつ弁慶をた
ぎしめちるぶ弁慶よまいきて
ぶも弁忠をいたんが経や作
弁慶をすぐしむるす和子より
もよろきいが其中ふもいぐら
を奏しひ女独ぶひぐもなて

おろやおの弁の器の古への独昔
にて出られて和光同塵の結縁ぜめ
相応道い利物終弁の代七代
出ぶほよ人あつうして情欲わ
つぶなて天地ひらきぐまり
よりぶ歌ぜをみちうぶをほあま
ぶて貴ぐ言ぶ法の世ぶ妙成

心を感ずる故、よりて深き心をあらはす
ぞとて（上ヨリ）鳥居乃かさぎを高くかけ
あまきいろをかけ、ぶつまつかき
きびやうよりきり、貫きも見
をかびぶつの御楽夜に明て
指づつをすゝ高くまく

忠度

花ともうとく捨るなりけり月ふ
き雲吹とりて見ぬ後ぞ乃ぬ
門よりあり者ゆく作掃もとあり
なく成ぬ白くぬ。か板乃ぬとお
まてゆく西国をゆび程よ。此度
思立西国行脚と心ざし城南

乃部宮よりたちもどりて都を離つる山崎
や鄙戸は宿かりて泊りも果
ぬたびのあらひぢの水はかもまづ
うり姫の浮世のあくたがはの名乃ふ
篠をとりけるとくに月も宿かるこや
乃池水底清くさやけてう世の
塩かぜ風のたとくぎりとなる

ようきとこのぱ捨るみをもあり風山
かいれうれ当る世事乃ぷうきのよろつハ
あぶ夢のざむるまくらよ鐘とほる
雑波へ弘よあるをかぶあき浪をさ
小舟うれ〈ぢ上声世をわるるあら
ひとてかくうきわざもありぜ風乃
ゆまめ時だよ塩求をそこべほをど

もひまいあれ宴乃浦山かきてせ度
乃海　あ度のよびきひまあきよ志べ
なくる鳥ぞ音づれやほき　柳洗
須磨の浦とやさびきゆ春の眞ん
をうるわくらゆよ人あらばせ度の浦
よそしほたれきつゝとこへよ賞
や漁乃あ度ふ船も乃煙松の

ひいつきかてひくからびと言うすあま
まこ汐せ度乃山陰よ一本の桜れい
是ハあるへのあき治の芸ゝ乃木
あり春ゝ支ゝ時しそ芸乃花ま向のため
よ逆縁おゝ可ゝ見乃山より加つるを
ゝゝゝ里ごよ。新よ花を打うへてる向
を知て歸ゝ早いこ

見へ有る老人（ラウジン）これは洪山（ごつさく）
まして（シテ）はんび洪浦の漁をして
（上ヨリカル）あり（ヨワク）あらば浦よろう住べきよ。山ある
方へ通さんをば。山（ヤマビト）へ出つべきれ
（シテ）そも海士人（アマビト）乃汐塩をばやう（スム）で見まく
置ひべきまう（ヨリカル）言ことれいまとわり前世
ぞ〜ほたくなる御ひけり（シテカル）ものえま

を遠（オツ）しや塩（スム）すらる（シテ中）道（ロキ）こうかいれ
見（ミ）ばかまの人（シテ元）言まれ（シテ上ヨ）なを度乃浦
ちうきはの（ウヒロ）ヤ（ヤマ）ま（ザト）よ（シテ上ヨ）栄とい（カ）ぬ
（ゴ）ば（ヒ）ば（ヒ）ば（ヒ）塩（スム）水の（ラ）ためよりかよひ（イ）ら（イ）ま（イ）で
（トシテ）（ウ中ヨリ）
あまりよ愚（オロカ）ある浦（ウラ）（ヤヲ）
上ヨ
ぞ（ヤヲ）ハ（ハ）ぞ（ヤヲ）を度の浦（ウラ）よの可ま（カハ）や替（カハ）るらん
（ヤヲ）ハ（ハ）
ぞれ（ヤヲ）花（ハナ）よつらきは（ヤヲ）ぬ（ヌ）のあらしや山（オロシ）風（カ）

乃音をこそいとひしよ。さ風のわら
木の梢い海すこ、すこだみも蘭ゆべかい
ようら凡て山乃様もちる花を
早内 妙よ射給やや日の暮てゆへ一夜れ
宿を古かしへ引てうてやお洗光乃
陰ほどれお宿乃べきら 言こ見
花乃宿あれば去おぐら。誰をあるど

と言むべき 行暮て木乃去こ陰
を宿こをば花やとよひあるど。おら
まこと詠へ洗菅乃去こ。痛ゆ
や秋らげやうあるあ風だみもつねい立
より吊らひやよ。中僧遣いあど逆縁
おぐら吊見ぐこ。れたつよまこ
人ごの日 早内 行暮て木乃去こかぎを

宿しをばやとあるじあらまとと
嘆かへ人に薩摩守忠度と申し志人
也。此一首の人戦場にてぬかるべき人
の植たまたる。弱り果ぬ作なり
上カハル
こゝろもつぎの値遇にえんぱも
さぐりとあり乃和尚のあとて
あきからぬ宿をよひ乃あるべ

乃人
上地
名もたぐ乃ぶ者きて花の
墓を問へ方雑や入らるとはぬく
上地
吊ひ乃聖吹て往事をえんぞ嘆き
ふぐぎや人の老人の向乃きをタ
よ愛てよろこぶ氣をみしたるい行
乃かゑこあるやら愛 浄僧よと
れやちんとてこれまぐ来きりと

上月

夕の花乃陰よりねぶ、夢ハ昔をも偲
ばへ都へ立ちかゝるけしんとて花乃陰よ
宿り求の行方遠きらびゝ明よりきり〳〵
早川
なそと都よりかゝりつゝ宮家よころうす
やけしんと　桜ゝ月もやゝかゝぎろふ
乃ゝ〳〵　松のゝ〳〵もゝ〳〵ちる鳥の弦
みゝぬゝ乃ゝ〳〵乃ゝ〳〵ゝる花よ桜ゝて

軒風をもゝ〳〵て春よきゝ〳〵や
音ゝ〳〵ごきぬ度の岡やの牧寝ゝ〳〵
枝ゝ〳〵
声ゝ〳〵ゝ〳〵やあき弥ゝ〳〵
ざむる心いゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
やけしん為よ縄ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
見ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
あるよ行なゝ〳〵乃千載集乃哥の

きおよ書いりたきども。勅勘のゆゑ乃、かゞ
ゆゑ。後人きっとと書ていゆ。妄
物乃中の第一ありぢきどもうれを
撰び給ひ。後世人を教ありぬべ
ぢ。ゆゑ人ありけゞ今
乃宮家君よりうるべく作者を
つきっく当びに給へと夢あがり申よ

ぢ。ゆゑ乃心をよ　ぎょゆ
和学乃家よはまれ。其道をたゞちこゝ
し。ゆ乃かぎよよつ事人倫よれ
てきっぢらなり　中ゆも忠度
当。氏。武二道をうきを言て芸よ眼
たゞ。ぞもくゞ白川院乃御宮よ
千載集を撰りる。五條乃三位後成卿

ぷきをたつとく昌きをきんず年は寿永
乃秋の比ぞ出て時あれば上方にも聞ワ
かすとなく乃ぷくぷつとれ花ら菊菊の
ぎつねびよりひきかなとぷとあり乃
家ゆきこゆれとちをあぎ乃ぷ望
たりぬきバぷまる弓箭よつぎりて
西海乃波のうへぷぎと頼むを夜の

上北

うらぷ源氏乃ぷを元乃平家乃ぷめ
よりあとちらばりぎるぷきらかき
けりる猛よ元乃谷の合戦ぷいかうよと
みえぷほどよぷ乃くあよ元業て
海上ようム
抜き新よろんとて
みぎぷの方よりもぷ出よ段をきれぷ
ぷきの国乃住人よ宮部ぷ六郎太々

忠澄と名乗つて打つてかゝり
たりけるを見て中間
弱の手綱を引かへさせやがて
むずとくんで馬からおとさんとす
ればこゝを堪へたりけるとて
手をゆるめよ　上月
六郎太郎ドウ申候
より立まつりてよまれまし
忠度の

右の手を打落さるゝ所を
六郎太をとつてあげのもとへ投げ
とゝぼめて　こゝろ得べく
よ武をゞ成もしのまひてくれ用遍照
十方世界念仏衆生攝取不捨とのたま
ひしかばこれよりも痛りやあ
あくも六郎太たちをぬきもつて

沖頭をうち拭ひて
見るやうもなく
見れば其とも
比ろうぶくそり
おき時分
直衾たるよう
拭ひきんだち

長月
錦の
ぬ
ぬ

かを洗ひ
ぎやおうんぎやくをつきられ
ぬきば指宿の
下陰を宿とせず
あらまし
扇ひあらう
まのかこみて

上月

忠度とかたり
ひとよ
ひ乃
ひ
痛つき

花の陰に立寄り給ひしをかく物語申さんとて日を暮しとゞめしなり今は疑ひもあらじ花は根に帰るなり我跡とひてたび給へ木陰を旅の宿とせば花こそあるじなりけれ

熊野

ワキ 是は平の宗盛也偖も遠江の国池田の宿の長をば湯谷と申候久しく都に留め置て候が老母の労りとて度々暇を乞へども此春ばかりの花見の友と思ひとゞめ置て候如何に誰かある トモ 御前に候 ワキ 湯谷参りて

ならべ洲方へやとて見てん 上際夢見る
城さき法師やく咲出花を尋ん
見へ遠江國池田の宿長者に問よ
仕へ申樫とやすみて。ミ羽 梅もゆや久
布部より出入ひぐ。け程老母乃出痛り
とて度こ人を出よきへば更よ下下
もあへ程よ此度へ樫ぐ出近よりん

上り 洲程乃出梅の衣乃日もうひぐ。ウ
我夕暮の宿あらん夢も数そよりー
梅ぐ。流ブ 夢て程よ。イ 都よ早く宿
イウ コトニミイト
よきりく。ア 忘れ程よ是へ早都よ宿キ
ろへ出乾成出内ぐゆや乃出入可ふく
方りぎ。ゆ。出そこ事内をやこぐやと思日
作ぬ。ゆよ事内やへ池田へ宿より樫ぐ

上ニテサレ

会釋

まるおは雨露

乃めぐみ春ひえて花の父母より

況や人間よりはいとくちをや草は心元おや

なおとこ山に入て浅間田宿より撞

がまりてはしてあるは撞とやうら草ゆら

や扨は痛りは行とは入有ぞ

はしり出るは乃ぶは陽炎人あら

姫やはたてはあるみうぜるみて蓋

嘆やは洗はるのやうも頼ぞおうみて

ては撞はは入て洗上は撞をも

つまてしまりは山文をもはめは多く

はは眠をやちうずするみて有ぞてあるは

まりは入は渡りは沼みて渡ぞて

や湯谷のはまりみてん童ごしまり

たる由申へ　ひとしいうよ上
いかやの山しまりてハ　此方へ来れと
ナレとも　見くゝ仏ハ方へハしまりへ
妙ノよナレハ　母の病ノ水外ま
とくに浅い撞ノ文を上きてハ　びんあり
へたくと見しまよいきらべ　なと
出羽ノ文とゞ仏やみるまでもう

それはたらちめよ法へ　甘泉殿乃
まの夢　思をくだくりとあり
ぽ山宮　秋乃ノ月終りおさま
もあらび　三代教主乃ノ来も生死
乃極をば通ま　ぬ月乃
比申ごとく　仏や浅洗まへ年
ふり塙る朽木樣　計乃きれを

世よ物をやきごとに心よわきあんの鶯
逢ふ事を涙よむきぶつり也唯如る
ぶくいのきやうよ中に世をいと感を
給りて一度まみくたりませぎあき
だよ親よハ一世乃ちなるよ同世よ
ぜようひ張たびハ巻ふもりづき
給へ唯ひたすら命の内よ今

世と度ぶと手うせ弦へとよ巻ぬきべ
きぬぶのあるといへいよくゆまく
ほうき思ひと古とも男乃涙
おぐら出留世ちとやうく
荘原乃葉年の長ハ張よ陽あきを
長昼よ伊張ハ巻毎乃よめる子あり
拙らて葉年ぬぢらぬ乃あくもゐ

ぶ毎をといつる子乃為と讀しつゝ弘
誉あきく　へうゐか様よくへば出眼を
給り東よりとうべ　　老母の痛
もりゝ去下あれどももりあぐらこの事
計の花乃あいうでうみまして給つべき
市ニ成ばをうへもおびたきあれば花ハ去
あらべ今よ限るべうらべ見いあるべある

ぶもつあぐきあと成やきん見ハ眼
をなりうへいやくき様よ心よわき
ぶよ住きてハかあまじいつも心を
慰めの花見の車同車みてともよ
心をなぐさまんかを　牛飼車よ坊よ
とてくぶ見も思ふ乃家のうちぢや
出ぢとむまで心きちきよ行ぬま

ぞよわ車たちゝらあきの花ありきり
上ニヤ
そゝ清き水ひろまゝくとめくまば
北
河い音羽乃山桜　東路とても東
山きめて其方のあつらや　北上　書かゝ
雨あつく花ゝ冷くるや早し秋は
よ霜おりて高雲遅し山ゝ
ひつく山つゝ路中よ道おほうして

道極まり有り山青く山白くして
中ノ
雲来去人楽人愁人皆世上
中ノ
世有様有り誰ひとりこの色ゝ
上ノ月
長岡有る東山　四條又像の橋
二
うゝく老男女貴賤都鄙ゝ
又
めく花衣袖をつらねて行せおの雲
ゝとみて八重さゝ咲九重ゝ花威

名よ杉の葉乃まぎれ　上ヒギ北　下原
わけてとる行ばゝ道ぐ心乃狩もなく
車大路や六区の地蔵堂よりハ
城ぐめと　上レテ　観音も同じ所あり。単槙教世
の方便あらたよ　上ル　ちもと成ぬと
給へや　北上　六ゝや寄りの末ぐよ。頼世
命ハ去らぬ乃愛宮の寺を打ちぬ

六道のさとりや　上レテ　六ゝ打そうや法道ハ
冥途よ通ふあるあと心ぼそ　上ウ　鳥部山
北上
煙乃もゝも薄霞む声も極鳥のよ
こたちる　上レテ　北斗乃星の曇ぬき　北法
の花を用くなる　上レテ　源堂の見ゝよ
北上
其垂乳根を寄ぬあるゝ安の塔をとゝ
ぬ　上レテ　ぬ乃陸ゝ駒の道　北　ちや狩

もおくれぢうこの車宿り馬留め
宴より花車やりの乃宴より歌
ども乃ちぢ乃ちぢ踏清水つ仏乃陸まへ
会諏して女乃彩檜を申さ
妙よ引者 出前乃 湯谷き
ぢくよ者ぞ 東堂よ応 行て
遅おりたるぢ ぢいでこれ乃ろと

中ぢへ 曇て ぢいろよ樺よ中ぢ早苑の
本の酒宴乃始りて ぢ ぢいて出し手
あきとの中ぢ 真田ぢ れ久
四得中ぢ ぢ早ぢの本乃ぢ
酒宴の始りて ん 急いぢ出し手りあき
と乃ぢ中ぢ ぢて 仁と早酒宴の始り
たりと中ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ

ぎるまでてゝ有ぶく清こゝろ和泉
まゝ人ぶ芸面白の花やゝ今を感とみ
えてゆ有にとて世當座おどもも
遊ばされんぬぞ宮や男中よあ
きぶ色ゝ呼人ゝ顔ゝ月ゝよりやゝ沖ゝ笑ゝ
あらひ歌ゝくもまゝ鈴ゝ上サレ花
前ゝ蟬華紛ゝ月ゝ柳ゝ上ゝ鶯

とぶ行ゝる人ゝ花ゝ流ゝ水ゝ随ゝく
香ゝ求ゝる下ゝ鐘ゝ寒ゝ雲ゝ陽
ゝく声ゝ至ゝ長ゝ暮ゝ清ゝ水ゝ寺
ゝ鐘ゝ聲ゝ祇園精舎ゝ諸
行ゝ無ゝ常ゝ沙ゝ羅ゝ双ゝ樹ゝ
ゝ色ゝ娑ゝ羅ゝ双ゝ樹ゝ必ゝ滅
ゝ世ゝ有ゝ為ゝ転ゝ変ゝ

を元い捨しよりおぼへ雲よりたゝ然
鷲乃尾山のなかを流れ寺も桂乃
橋柱ゑ出さく峯はれやかあらぬ
樹の紙間林下げ南をるらよ
眺きべ大悲擁護の薄震然形樓現
乃うつりまゝ汚れも同じ人うぐ成れ
稲荷の山乃うもと紅葉のあをかゝ

紫の秋又節の表い清水の底をたゝ
頼をしきのもちづ乃花盛　みの名
は音羽あらし乃花の雪　深き情を
へ乃やまるム童所酌よまりゆゞ
如乃ゆゆや指葉へ　深き情を人
やまゝ中舞　御ゝ村雨のて花の
散いうよ　こゝ村面乃ゆり来て花

七を敬ひよ　意心あり村雨やおまえ
雨の地に降るいとゞかく　撫花敬を
惜まぬ人やあるまじ　よりたのもしき
ことの種あぎきれば妙やまさん都
のまも惜きしゞ　あまりあづまの
紀やあらん　道理あり気也早く
眼とらひるゞ東よりとまえ　仔洗

いと感ぜゞや　中こゝの良とく
ゝりたゞ　あら姉やたゝ
やおもし観音乃世利生あり　見返
なりやうまゝやお　見まで有りや
姉やおかして都よ供ぎぼまも
や洗意乃かたべまたゞ洗まよ
出いと感ぜゞ　つきの鳥ゞあくあゞ

まぢかして行道の袖てやをらふ
逢坂乃関の戸ばかを心まつ明行
跡乃山みえて花をたをる客人
乃うれを誰路我はまつ。あづまの
鶯ま名ぶ水〳〵

相三人
緑ゆるさの法ろの花。法よろ
や高く浪
見へ諸国巡行乃
聖ゆて作。我一遍上人の教を受巡
行の利益を六十人余州ゑ廣め。六十
万人決定往生の仏れを普く示
生ゑ與へ作。巡行上総国ゑ入ひ〜ぐ

是より奥へと志しい[三人り上]秋津洲[九]
の国ぐめぐる法乃道[ニワヤ]く。迷[マヨ]ふ
月も光りそ[元]ふ心れ[ヒ]なくを白河の関[イ]
路ときけば秋風も[ウ]つ[元]タ霧[ギリ]の
いぶくようを雪[イ]月を宿[ヤト]り[ゴロモ]宿日も[ト]
タ[ユフ]ぐれ[ヒ]ま[元]ま[ヤト]ぬ[ル]よきり[イト]く[ヒ]
音ふ[ヒ]へ白河の関をもるとあ[ル]ぬ[ル]是

よあまたの道のみてい。廣き方へ
ゆきやと思ひ[イ]作[シテ][行]ず[ク]く旅行
と人の伝[オシ]借[トモ]乃人よ[ヤ]べき事乃ん
旅行の雪[ヒシリ]とい[ウ]れ[ル]ば[コ]ヨ[マウ]ま[ウ]てか
[ラウソク]ぶ[ナリ]ぬ[ル]ぬ[ル]と[ヒ]ま[ギ]ぬ[ル]や[ミ]ま[フダ]
ちも拾[ヒ]りべ[ヒ]ま[ヒ]ず先[センヲ]ひ旅行の法[オン]
下向[ゲカウ]の所も古道[フルミチ]とて昔の街道也[オン]

通りしもせられば昔の道を教へ
けんとてたづぬるに是迄まゐりつる
ものゝ扨いかなる故の旅行も此道あらぬ
古道をたどりしものの有しよあふ
昔い此乃あつてあれなみたる一村
の森にあつの河岸を出通りあり
街道也其上朽木柳とて名木あ

り人乃出法の声い其
木までも成の縁ある結縁たり
こあつへいらをとて老たる馬よあ
らねども道まるべあり急かを給へ
拾人うやはりおとろうらうへ
跡絶てく言うつる草蔓まかうやも
みづれあひてる法華寺や独よ打ち

秋の霜露に衰へてこれば昔を弱
古塚に朽ぬの柳枝さびて陰踏道い
出まほもおくに渡る氣配かな
見社貴人徳道ふて少へ文芸成古
塚のよなる社朽ぬの柳ふて仏縁
出賢人　柳い洗塚のよなるがれず
乃柳ふるくしひきるでやころ川岸も

水絶て河ふひ柳朽弱る若ぬそ
枯みくわひ蔦昔乃ふそひかを
青苔横七堤を方様城よ星霜
年かりたり掬いたれ世よりの名
ぬやらん歌語りなりべ　昔乃
人のヤ直しい鳥羽院の御代藤
兵衛叔清出家し西行とやこそ

歌人洗国より帰りて清き水堂を
月半ばなる洗河岸のこゝろを本よ
ぎ立より信濃に一首を詠じ給ひ
しより謂ひ上げ謂ひなべ面白や扨て西行
上人の詠ぜられし行きの言葉やらん
六時不断仏勤めの隙なき門なも
洗集をば賢きるかい新古人うま

上京の道のべ清水あるゝ柳陰〳〵出
ぎとして社たちとまり涼みとる
乃紫の束の世ことも知る若木おい
つゝやゝして老人の八十余を
絶り時前をうんとみつるが朽ぬ
柳の古塚よりとなりて出はき
早く中入つゝみぎや扨朽木乃柳の。

抽ぜんとせかれ　きるよと　上三人　思ひた
殊の外とよ　ぬ　法を　て　称名の
聲うちそよる　初夜の鐘　月も曇ら
ぬよそ　ぐら　露を　く　袖かく
（返レテ上出端）流水　紙海　蔵　へ　柳　深　うらを
ひいく　荊　屋　る　徒　朽木の柳
時をえて　ぐ　法　あひ行の

直ぐ道　ひく　泥　の　へ　地上　宿生　称名
必得　生　功力　る　き　く　生　木　も
仮果　る　る　老木の柳　髪　乱
自然の　老人　と　顕　る　ぼ
しを　柳さびる　れ　ぐ　や
おちを　古塚の草　深　朽木の柳の
木の本より　長　検　たま　老人の

忘ぼ猟衣を忘つ。臥き給ふ者
不審あり。仏を不審給ふ。
ぞや我法あらつぎぬ日もメ昏
乃道知べきと。具老人て也 拙者
首代道知べきと。人朽木乃柳の精
法乃教へなるとを非情意乃草
木の臺よりする事あらず 中〻

あれや一念十念 一声のうちよ
はまる 法の教を 汝ようきをく
上巻 洗界一人念仏西方便 有一蓮
生但使一生常念 洗記へて家
よむ上ぶ上生よ 至浄土ぐ焼
しき 釋迦をそ滅 法勤いまぶ
はぎぶ法乃悲願を軽まびいらで

仏果をいるべきこてくり地　南無や麗獨帰
命項礼本願いつりまゝ安さび。超
世乃悲願よりをを仕をて他力の舟よ
のりの道　則彼岸よ至らん下。一塚
の松乃ちらちらびや。彼黄帝のくわ
てきの心やや秋の風の音よ。散る
柳の一葉のよ。蜘蛛乃楽くちく

かゝの糸引渡る姿より。エこ出きをを
の道見も柳の徳ならびや　其外
玄宗華清宮よも。宮前の楊柳寺
苔乃花とて。詠め絶まぬ。名ずより
クセ
うの加茂陽や。清水寺のいよ、五
色よみえて。瀧浪と。寿登り水上
よ金色の光りきひ。朽木の柳忽よ

楊柳観音とあらはれ給ふよ絶えぬ
弘とめぐり利生あらたなる歩をた
こぶ宮地也ひきべ都芸花盛大宮
人の作移るも。靴鞠の庭は面白本
乃木陰枝高く。笠よりひろあるる皆凡
音柳楊とてきいまぜて錦をかざ
る諸人の作やうなるやこひは陳伸

くる風の匂ひより手風乃席の引
繰も。おぐさ思るよりなら塚のまを指木
はびあるる。高野路をよりあり。見き
老たる柳久つ。狩衣をかざりも。凡
ふるぐよりよ見をとのよわきをよりや
老木の柳氣力あらてよわくと
。立まふを夢人を魂とみるぞ。ろかま

もとへうれたき柳の道　来いぬ月よ
ぢれくかん　序ノ舞　青柳よ。嘗ばこよ
羽ばのまひ　柳花苑　どうだも
ほえまする　柳乃曲も　歌舞の
菩薩の舞の　狂もをぐこをよ人乃
法ばとうきよろ　はるばる来の舞も見
迄ありとぷら　強乃ちなみぐの　むまを

ぬきるぷ　柳の　いとちんと
ぷつきの鳥も　あきの曲よい
柳像をわがぬ　手柳ぬとやぎ芸
ぶ　ぶもたをやうよ　そぶい若木の
枝をすくすく　ぶりの風や
いとちんとだぶよ　見をもよろく
よわくとだふ　れ柳ぶねの

床の草は枯のこりて夜の興りも他
生の縁なり上人の法西吹秋の風
うち払ひ露を求の袖も散ぬ
弱き木のもちぐさもあり果
ぬ強き枝ぞなりまさる

藤戸

昔聞みしかとこの行末やくに藤戸
乃渡りとかいふ浪早汐見に行て木乃
三郎盛綱みて此所に拠もと度藤戸
は生て陣を仕り恩賞を覓鴻を
給はる程よ所人今
入部仕り秋津洲の浪おとなし

鳴めぐりて、松吹風も長閑なる
空まめきるあさぼらけ、新も昔ある
浦づたひ、蔵戸より早く蒔きりく
早内
いろふ初ちあるもの前の作り皆
訴訟あらんずる者ハ兵庫のとやうへ
参てんぬやうよ皆々慥に国人渋浦
乃田主作と木殿の御入部まて有ず

何事もうあらん者ハ兵庫
とやうへ参の波都て蔵戸の明暮よ
昔の書乃ぬへきうり
見ぬる女の訴訟かぎて墓をみくしけ
めぐくとあくく何事ぞあるぞ
海士のかるもよすあ出乃我らと強を
法ぬるめせをぎ、何程ん本より

も因果のめぐるを小車のやたきれ
人の罪科ハ皆報ひぞといひながら
我子ながらもあまり科もためしも
浪の底に沈め給ひし御情なさす
につきそひなかれだに御前に参り
てハあり　何と我子を浪に沈め
恨しハ更に心なぞ　扨あら我子を

波に沈め給ひしやハ〳〵　あら音た
らし何とし　あら我故人ハ志らじと
ありやこに其方候をとりて訟を
も弟ひ又ハ母はおわたる母が身をも
どひ慰めて給ひばハ恨もする
べきまに　いはるとて加君が山ご
うひあきハ世の人の扨ひ草も志げ

きあを行と陽の炎上に住果ぬ世
八幡の宿あるを親とて行や
浜ぬ。まぼろしよ。れてあるきべ悲び
「男ハよ〳〵をひく、ぎづあつく、苦
しこの海よ深き海ひ。と責て出ハを
泣へや跡とあらはをたまへや言語
道断かるる便明すこうらの今ハ

行ちうむべき。其舟の名候語語て
吹きべ。うよ。同へ。物も去
年三月廿五日のあるへ入て浦に男を
入ちづき。此海を馬ふく渡とべき
所やかと尋ふ。彼者やうぷんど
行願ハ行旬る所のつん月ひらよ東
よあるとの月ハまよ西よあるとやス即

八幡大菩薩の御告と思ひ家の子
わらはうもふく隠し彼者と唱二
人共よまぎれ悲しび出洗海れあさをを
分け蓋く後ひとりがゑ感慨深ふ子ゆうぱ
やく下賤の筋ある者ふく父をや人
よ語らんと思ひ便よ所なしかども
ぴつく引よを二刀ぬき。其まま海よ
沉めく歸りぐ。母ハ泣ぐ子ふてあり
きるよ所よりく行方も前世の子
と思ひ出ぺ恨をいれ人女房母ハ我が
を去ぐめ行方ぺ性有ハとりわいづ
を程ふて作ぐ。あきよ人くさうう
ふ人の岩ポ子ふの水ふ入よ泥
骸をふくかくり。母ハ人の子

しもずとも たがひにぶりきり あのほ
とりぞと 夕波の 口キ よりる乃 事ふく
かり 程ふ人 ちきら ぶ ゆ たれ ひ ま
女 塩ち 隠きた あき 法を 口キ 深く 化と
思べ ども 女 ぬ ず し を ぶ 上月 悪事ふ
里を ゆき だ ふ を ば 忘れぬ 親 ち る ふ 人
を れ ま ち き ち ふ の 酬ぶ

宮や人つ親乃心に間よあらねばこを
思ふ員と 上月 ふ 上月 と 上月 ふ 上月 れ
本 ま も 宮 め わ き ふ ち り ま ま る ふ
ま ふ 参 ふ 不 宮 ち ち ひ ち ち ば わ ち き を
ち き ぶ て ち 雑 面 く る ふ 参 鶴 の 眼 ま
乃 ち ち あ れ や 宮 を ぶ 思 ふ 親 と ふ 乃
ち ち あ ま り の 年 ち ふ か り ち め ふ 立

離さじとも思ひしよりいつ
の世よあつべきい世よもあべうきて
きげき行げの様そら共たつまと
あ女の浄世をとゝあきべうへ行よかゆ
ゝ露をかきてまつありづひもあらべ
うう世のうきあるあをなるとと
同じ道よあつてたぞを給へとめも

きうびゆまつひ物ようへはをうへやと
うつあうい山橋をみるうう気味きれ
あら不侵やびへうへ根てもうひあうて
みてかるぞ。縁者の跡をも弔ひ妻
をもをも世よ言うびるみてあるぞ先
わづやよゆりへ。ゆゆよ祖あるゆよ
縁者不便あ程よ面ぐ乃弔ひを

前ノ今乃母ともせよ言うずる
みちく有ゞ昌よりも付くへ（上平三）（中入リカク）極ぐ（トル）よ
第般法の声たてゝ（ヅニ）（ラミ）（ウ）浪ようきよ
乃よりとなく書（ヒル）（ト）たわゝぬ第ひに般若（ヅニ）（ハニ）（ウ）（ニヤ）
此和のたのづゝら耳（ト）（ハニ）もづおをかく
法の心を去びめ聲をあぎ（ヅ）（ラトウキ）（トキ）一切有（ウ）
情（セウ）殺害（ガイ）（サン）三界不陸（ダ）惡（アク）報（ほうレテ上）（一声ヨウ）うや

思ひ出ず忘（ワスレ）ずとゝふ心ゝ忘ぬよりハ
なを（ヲ）（ウ）（ト）ものまを去（ウ）てもう当あぐ当ろの
宮めかく花（ドガウ）（ブ）科よりるべ水よ社（ヅ）（ミヅ）濁る
心に罪あらば（ヒ）（ヲ）なるき罪（ザイ）科（ガウ）もかるべきよ
よ当りきる海路（カイロ）の知（ルイ）べ思（ヅ）べ三途（サンヅ）
ひ中（ウチ）ぞ当り（ロキカル）（ヨリ）（上）て、ぎやおそや服方（カタ）に
水（スイ）よりぞ化（ケ）たる人のみくるハ彼

亡者も、やうやう死なと亭吳れ思ひと前
きれば、吊ひ方絶えんだらみハ
畫ぬ事執ちゃうり為よ寄りたを
アと恨をメ月の其よ海浪乃
敷戸乃渡をを人よとの伊も杉き
安波の伊瀬乃掾ある法ろ通りを
教へ、まゝよわるしらべ引前の

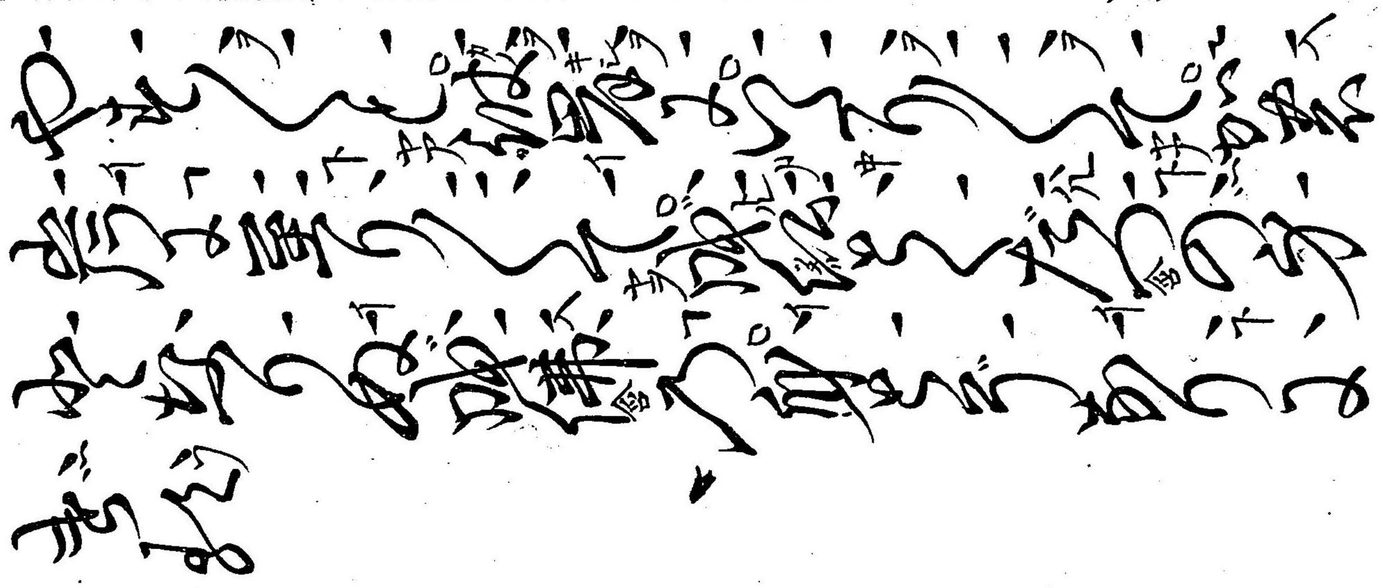
法名をあぐ曷の法名か昔より人うよ
至るまで馬ふくらをとわひ事
奈代の様ぬきべて洗濯を恩
ふる程の法名掾ひも我ぬ名まば
いろ〻る恩をも、ゆるべきよ
知よ一命を、戸代ゆ馬ふく海
を痍せよりも見ぐ奈代の為

あるぢやうもふかくもあらぬ所なれば
うきたる岩のごとくにて
あの氷のごとくなる
脇のあるをもぬいて
きばきもの縄を前にかけ
まく海へ押しわたして
よ沉うよ

千尋の底
柳ひく塩

きてゆく波の深
ぬ深さ
ぬ埋まぬ岩の
碍よりあらはれ
思能の水
思ひよ思ひ
世知よりをえて
浮べばみまき揮
まる死の海をわ

弘誓の舟
ひの法の
ひらくゆく程ふ
りてねがひの便よ



226
183

明治參拾貳年六月廿五日從出版御届濟
同　參拾四年一月廿八日迄
同　四拾參年十一月二十五日　再版御届

復製不許

訂正者　觀世清廣

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町角　檜常之助

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂